
林檎殺人事件

D俱楽部の悲劇

愁朝巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

林檎殺人事件 D俱楽部の悲劇

【NZコード】

N1530D

【作者名】

愁朝巳

【あらすじ】

雪山口ケの前日に温泉宿に向かった三人が体験する悲劇（喜劇）。なぜリーダーは笑ってしまったのか！？ブラックメティ

・・・・・“じりじりこんなことになつたのだから・・・・・。
・・・・・“ドンキリ”にしてはひど過ぎる・・・・・。

リーダーのH後は痛みとも快感とも取れない違和感を振り払いながら生き延びるため、必死に林檎をねじ込んだ。

・・・あれは2日前のことだった・・・・・。

「明後日から急に雪山口ケが入りましたので、当田の朝は寒くない準備をして来て下さい。」

マネージャーが久しぶりに三人一緒に仕事が取れて嬉しいのか、喜び勇んで三人に告げた。

「着こんで来てもどうせ口ケはふんどし一丁だらー
シ島が嬉しそうにニヤニヤしながらマネージャーに言つた。

「どこで口ケだよ」

リーダーがマネージャーの持っていた番組の企画書を見ながら、

「ああ、この山か。この山の奥にいい温泉宿があるんだ。明日は休みだから明日から先に行つて久しぶりに三人でゆっくりするか」「雪が凄くて奥までは行けないだるー。それにリーダー行ったことあるのかよ?」

G門が心配そうに言つた。

「夏場に一度行つたことがあるんだ。ちょっと歩くけど一本道だから行けるよ。それに今年は雪も少ないだるー。なあ、行こうよー雪見酒もいいよ~」

『これが彼らの悲劇の始まりだった』

・・・・ どうしてこんなことになつたのだろう・・・・

G門は既に済ませこの家の主人から許しを頃いた。
早く俺もこの林檎を入れなければ・・・・。

「す」じい装備だなー、G門は」

G門の冬山用の重装備を見てリーダーが笑つた。

「ハ、ハ、ハ、そんなに着こんで来ても明日の口ケはスッポンポン
だけどな」

おどけて一番軽装なし島も笑つた。

三人は明日の雪山口ケを前にリーダーが一度行つたことのある温泉
宿に泊まろうと雪山の奥へと向かつた。

雪山の奥は行けば行くほど下界とは打つて変わつた積雪量と吹雪で
冬山に慣れていない三人は前後不覚になり、ついに遭難してしまつ
た。

「リーダー！宿はどこだよー！」

「こんな状況でわかるかー！」

「こままだと遭難しちゃうぞー！」

三人は吹雪の中をさまよい続け、寒さと吹雪から身を守る場所を探
した。

どれくらいさまよい続けただろー。すでに辺りは真暗闇で、このま
までは三人とも死を覚悟したころ、前方にぼんやりと灯りを見

つけた。

「助かつたぞ！」

三人はその家に泊めてもらおうと戸を叩いた。

『男三人なんて泊められるか！』

冷たい家主の返答が返ってきた。

・・・・・どうしてこんなことになつたのだろう・・・
・・・・とにかく林檎を入れなければ・・・もう少し、もう少し
で俺も助かる・・・
リーダーは必死で林檎をねじ込んだ。

「お願ひします。一晩だけです。いや、この吹雪きがおさまるまで
でも結構です。冷えきつた体を暖めさせてください！」

三人は必死で家主らしき老人に懇願した。

三人は体が冷えきり、唇も真っ青で、確かにこのままでは凍死しそ
うにさえ見えた。

「この天候でほつたらかしたら確かに死んでしまうな・・・よし、
俺の言う約束を守るのであれば一晩だけなら泊めてやるう。」
「守ります、守ります、守りますから一晩泊めてください。」

三人はとりあえず中に入れもらつた。

家中に入るときれいな娘がいた。どうやら老人の孫娘でこの家で
二人で暮らしているらしい。

「ところで約束って何ですか？」

体が暖まってきたし島が孫娘を舐めるように見ながら老人にきいた。

家主の老人は島を睨みながらたしなめるように言った。

「約束とはな、この孫娘のことだが……見てのとおり美しく、可愛く、スタイルもいい。この娘に絶対に手を出さないと約束してくれれば一晩だけなら泊めてやろう。」

「なあ〜んだ、そんな簡単なことですか。手なんか出しませんよ。絶対に！でも、こんな山の奥にいるにはもつたいない本当にいい女ですねえ！」

島は睨み付けていた老人を気にせず厭らしい目付きで孫娘を見ている。

「おい！Rちゃん！変な気起こすなよ！」

リーダーが島をたしなめた。

「約束は絶対守りますので一晩だけお願ひします。」

三人は老人に懇願した。

『絶対だぞ！絶対に守れよ！守らなかつたらおまえら殺すからな！
脅しじゃないぞ……！』

三人は約束し一晩泊めてもらつた。

・・・・・どうしてこんなことになつたのだろう……・・・・・自業自得とはいえどもして……。

翌朝 老人が目覚めるとかわいい孫娘は居間で泣いていた。

「どうした！どうしたんだ……！」

孫娘はただ泣くばかりで何も応えない。

「奴らだな！奴らに・・・・・。畜生共があーー！」

老人は事態を察し、怒り狂い、しまっておいた猟銃を取り出し三人の部屋に向かった。

部屋に入るなり、天井に向一発放つた。

三人は銃声に驚き飛び起きた。

「おまえら～！よくも、よくも、約束を破つたな！このケダモノ共が！殺してやる！」

三人は老人の形相に震え上がりながら平身低頭謝り、娘に手を出してしまったことを悔いた。

しかし、老人は許すはずもなく、三人を縛り上げた。

「ただ殺しても怒りが治まらない。一人一人じっくり時間をかけて殺してやる。それまでそこで己の行いを悔いてろ！」

老人は外から部屋に鍵をかけた。

「俺たち本当に殺されるな・・・・」

G門が呟いた。

・・・・・どうしてこんなことになつたのだろう・・・・・俺と入れ代わりに出ていったJ島はまだ帰つてこない・・・・・ヤツのことはいい・・・・早くこの林檎を入れなければ・・・・

何時間たつただろうか。老人が部屋に姿を現した。

「どうだ反省したか。まあ、反省し悔いようとも許しあしないがな。

「水を下さい・・・

G門がかぼそい声で老人に哀願した。

「水と食物を・・・・

リーダーが頼んだ。

「何を勝つてなことを言つてはいる！オマエらの話など聞く耳はない！」

老人は猟銃を三人に向かながら今にも引金を引きそうな勢いで三人を睨み付けた。

『三人は死を覚悟した』

その時、老人が、ニヤリとし・・・・咳いた・・・・。

「ワシは見てのとおりこの山の中で孫娘と一緒に暮らしている。食
物に困つてはいないが、近頃旨い果物を食べていない。この先の温泉宿に行けば冬とはいえ宿泊客用の高級な果物が置いてあるはずだ。
それを分けて貰つてきてくれないか・！そしてある条件をクリアすれば許してやるーー吹雪も治まってきた。どうだ、このゲームをや
るかね！」

『三人は生き延びるためゲームを受けた』

「三人一緒にけば逃げるのは分かつてゐる。一人ずつ行け！まずおまえからだ！」

老人はG門を指差し行くように促した。

残りの二人はG門が帰つてくるのを待つた。
しばらくすると、玄関の戸が叩かれた。どうやらG門が帰つてきたようだ。だが、G門は二人が待つてゐる部屋とは違う部屋に連れていかれた。

「G門大丈夫かなあ？」

U島が心配そうに言つた。

G門が帰つてきて30分ぐらいたつた頃、老人が一人のいる部屋に入ってきた。

「よし、次はおまえだ！」

老人はリーダーを指差した。

リーダーは温泉宿に向かつた。温泉宿には確かに宿泊客用の高級食材や果物があつた。

リーダーは皿そうな林檎を分けて貰うと、老人が待つ家に戻つた。

「よし！よく戻つてきたな！林檎か。林檎を持つてきたか……。
よし、こっちへこい！」

連れていかれた部屋にはG門がいた

老人はリーダーの林檎をマジマジと見ながら話を続けた。

「ただ買つてきただけではダメだ！その林檎をおまえのケツの穴に

いれる！」

『エツ……』

リーダーは老人が言つたことが分からずG門を見た。

「入れる！リーダー！入れないと殺されるぞ！この人は本気だ！」
G門がリーダーに言つた。

「G門、おまえ入れたのか……？おまえ……何を買つてきた？」

G門は黙つてバナナを見せた。

『バナナかあ～』うらやましいそうにG門を見た。

『早くしろ！』

老人は猟銃をリーダーに向けた。

・・・・どうして、どうしてこんなことになつたのだろう・・・・
もう少し、もう少しで林檎が入る・・・・

リーダーがこれで助かると思った瞬間、急に笑いが込み上げ吹き出
しそうになつた。

「ブ、ブツ、ブツ・・・ブツ・・」必死に堪える。

『リーダー！笑っちゃダメだ！条件を忘れたのか！』

・・・・そうだもう一つ条件があつたんだ・・・入れるだけではダメ・・・・入れて いる途中に笑つたら殺すと・・・・

リーダーは必死で堪えた。だが、もう少しで大きな林檎が入る瞬間、堪え切れず

『ワアッハハハ・・・・ハツハツハツ・・・・』

“ドーン”

獵銃が火を吹き銃声が部屋に響いた。

G門がリーダーに駆け寄る。

『どうしてだよ！…どうして笑ったんだよ、リーダー・・・・・・・・・・』

リーダーが指差す窓の外には、

スイカを抱えたし島が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1530d/>

林檎殺人事件

D俱楽部の悲劇

2010年11月16日08時35分発行